國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

幕末武蔵総社六所宮神主家の政治情報収集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 和子, Ohta, Kazuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000180

幕末武蔵総社六所宮神主家の政治情報収集

太田和子

はじめに

武蔵総社六所宮神主猿渡家には「反古帖」と題された四十一冊の縦帳があり、遠藤吉次は『六所宮神主日記』[1]の解説で「ペリー来航前後の対外問題についての見聞を書き集めた「反古帖」が実に四十一冊も残っている。彼はいわゆる一般にいう日記はあまり残さなかったが、必要に応じて大きな出来事等の経過を日誌風に記録はしていたのである。」と、「反古帖」は猿渡容盛が幕末期の対外問題の情報を集めたものだと述べている。

本稿では、「反古帖」に書き残された情報の内容、収集時期、入手先などの分析結果から、拙稿「近世後期における武蔵総社猿渡容盛の歌集編纂と武相の歌人」[2]に引き続き、猿渡家の交流が和歌とは異なる視点から解明できると考え「反古帖」の分析を行い、猿渡家の交流、社会情勢や政治情勢への関心の在り方について明らかにすることを目的とする。

武蔵総社六所宮は、武蔵国の国府所在地である府中にある神社で、武蔵国内の一宮から六宮までを勧請したと伝えられている。天正一九年（一五九一）朱印地五百石を徳川家康から与えられ、家康が日光へ改葬される際、霊柩が府中宿に一夜とど

まった由緒から、元和四年（一六一八）境内に東照宮が造営された。神主家は、毎年正月六日江戸城へ登城し将軍へ拝賀独礼を行う。神職は神主、禰宜。社家は佐野、鹿嶋田、田村、中善寺の四家（文久三年六月「中善寺家再興諸書付下案」[3]）である。社僧は惣行寺、円福寺、明王院、安楽寺、妙法寺、花光院、泉蔵寺（宝暦二年一〇月「社僧支配方出入訴状写」[4]）の七寺。ほかに社人である。明治元年（一八六八）神仏分離を実施、同四年大國魂神社と改称[5]した。

六所宮と神主猿渡家については、近代になってから大國魂神社および猿渡盛厚宮司により『武蔵総社大國魂神社史料　第一輯』（官幣小社大國魂神社社務所一九四四年）などにおいて、猿渡家歴代の著作や神社史、周辺の国学者などが紹介され、さらに東京都府中市が『府中市史』（一九六八年）を、また府中市教育委員会が『史料目録』『史料集』などを多数刊行している。

藤井貞文は、猿渡家について『近世に於ける神祇思想』[6]（春秋社松柏館一九四四年）で、近世最後の神主である猿渡容盛が安政五年（一八五八）正月に水戸藩前藩主徳川斉昭へ提出した建白書のなかで神祇官などの再興について言及していることを取り上げ、「外交問題に絡まる時局の紛糾が、自然、衆庶の頭裡にも国家意識を覚醒したものであった」と述べている。阪本是丸も『明治維新と国学者』（大明堂一九九三年）で同内容を紹介している。

中野卓は、明治政府の神道改革への猿渡家の対応について「六所宮祭祀組織の変動—府中八幡宿の「旧神官」—」（『村落構造と神職組織』未来社一九七三年）で、近世に度々起きた社僧や社家の訴訟は「神主家による神社経営、そのため社領を小領主の家産経営として支配する方式に対し、神主・禰宜・庁官・社僧による合議制の神社経営を要求」したためであったとし、神主猿渡容盛が元治元年（一八六四）に神事改革をした意味も「社家のみならず社僧も神人をも、「分」相応に、神主家の神社経営、ないし小領主としての社領経営のなかへ抱きかかえ続けようとした。」と定義した。また明治五年に元神主、旧神官が士族に列せられる際の神主家の姿勢は、「小領主ながら社領という領地をもっていたと考えていた神主家は、自分が士族になるだけでなく、領主は家来を士族として持っていなければおかしいと考えるのは自然なことであったはずである。」と自家を領主として強く意識していたと分析した。土岐昌訓は、起源は不明であるが正保四年（一六四七）から天保元年（一八三〇）まで摂社宮之咩神社の祭礼に参会した武蔵国内の神職組

織について『神社史の研究』（おうふう一九九四年）で明らかにした。

一　反古帖に記録された情報

「反古帖」の分析に入る前に六所宮神主猿渡家について簡単に触れる。

「反古帖」の情報を収集したのは、主に一〇代目神主[7]猿渡近江守盛章とその息子一一代目猿渡容盛である。盛章は寛政二年（一七九〇）猿渡盛房の長子に生まれる。幼名伊折之助、盛栄、のち盛章と改める。能登、近江守と称した。文化元年（一八〇四）一五歳で新神主に就任、同七年父のあとを継ぎ神主に就任。同一〇年に儒学者萩原楽亭[8]と国学者高田正次郎（のちの小山田与清）[9]に入門。文政九年（一八二六）従五位下近江守に叙任。武蔵国内の一宮から六宮の考証などを行った。また樅園と号し歌壇を形成した。嘉永六年（一八五三）「異国船渡来之儀ニ付奉申上覚（下策儀案）」を幕府へ上申。[10]文久二年（一八六二）神主職を容盛へ譲り、翌三年七三歳で没す。著作は「武蔵総社略記」、「神代俚談」、「古今序略解」、「百首夜談」、「阿良波婆伎名義考」など。[11]

容盛は文化八年盛章の長子に生まれる。幼名伊折之助、のち豊後、左衛門、無位と称した。文政八年一五歳で新神主に就任。天保六年（一八三五）父と同じく小山田与清に入門した。[12]安政五年（一八五八）同門の西野新治[13]を介して徳川斉昭の下問があり建白書を上呈する。[14]文久二年父のあとを継ぎ神主に就任。父から樅園歌壇を引継ぎ、慶応二年（一八六六）から歌集「類題新竹集」（『類題新竹集』府中市教育委員会一九八六年）の編纂を始める。明治二年（一八六九）神主職を息子盛愛に譲り明治政府へ出仕、同一二年全ての官職を辞し、同一七年七三歳で没す。著作は「武蔵総社誌」、「万葉通」、[15]「武蔵総社年中行事」、「武蔵総社御神事式」、「武蔵総社恒例神供式」、「武蔵総社恒例祝詞式」、「稿本諸国総社誌料」など。[16]盛章、容盛父子は小山田与清の門下のうち「松門の十哲」[17]といわれる。

猿渡家は古代以来の歴史と格式を持つ神社の神主として、また国学者として社会や政治のありように豊富な知識に立脚した高い認識を持っていた。

「反古帖」は東京都府中市猿渡家の文書群（府中市郷土の森博物館寄託）に含まれている古文書四一冊である。表紙に貼付された題箋に「反古帖」の文字とその下に一から四十一までの数字が書かれている。題箋の筆跡は同一人物と思われ、書型、

表１　反古帖の書誌的概要

反古帖	丁数	項目	件数	記録の年代
反古帖　一	61	6	8	正徳4（1714）・享保4（1719）・同8・文化8（1811）・同13・文政７（1824）年
反古帖　二	67	7	7	延宝3（1675）・享保6・文政7・天保6（1835）・同12年
反古帖　三	76	14	24	天保11～同14・弘化1（1844）～同3・嘉永2（1849）・同4・同5年・年未詳
反古帖　四	41	44	45	慶応4年（1868）
反古帖　五	37	1	1	安政1年（1854）
反古帖　六	62	6	6	嘉永2・同3・同5・同6年・年未詳
反古帖　七	36	5	14	嘉永6年
反古帖　八	56	9	12	嘉永6年
反古帖　九	42	18	30	嘉永6年
反古帖　十	51	8	9	嘉永6年
反古帖　十一	44	13	24	嘉永6・万延1年（1860）・年未詳
反古帖　十二	38	7	8	嘉永5・同6年・年未詳
反古帖　十三	47	11	13	文化5・嘉永6・安政1年・年未詳
反古帖　十四	37	1	96	安政1年
反古帖　十五	44	13	33	嘉永6・安政１年
反古帖　十六	44	12	12	安政1年・年未詳
反古帖　十七	34	12	15	安政1・同２年・年未詳
反古帖　十八	65	17	30	安政1・同3～同5年
反古帖　十九	50	7	7	安政4年
反古帖　二十	32	1	1	記載なし・白紙
反古帖　二十一	37	2	2	安政5年
反古帖　二十二	62	2	2	安政5年
反古帖　二十三	66	11	25	安政5・万延1・文久1年（1861）・3月
反古帖　二十四	57	23	25	安政5・同6・万延1年・年未詳
反古帖　二十五	38	27	38	寛政1（1789）・安政６・万延1年・3月・年未詳
反古帖　二十六	59	1	8	嘉永6・安政1年
反古帖　二十七	35	20	20	万延1・文久1年・3月・年未詳
反古帖　二十八	49	18	26	文久1・同2年・年未詳
反古帖　二十九	50	8	102	文久2年
反古帖　三十	54	31	88	万延1・文久1・同2年・年未詳
反古帖　三十一	54	1	184	文久2年
反古帖　三十二	45	10	19	文久2年
反古帖　三十三	31	12	35	文久2年
反古帖　三十四	29	5	5	文久2・同3年・年未詳
反古帖　三十五	29	10	90	文久2年
反古帖　三十六	33	26	45	文久3年・年未詳
反古帖　三十七	32	20	32	文久3年
反古帖　三十八	39	29	51	文久3年
反古帖　三十九	42	11	37	文久2・同3年
反古帖　四十	28	7	44	文久3年
反古帖　四十一	36	13	22	文久3・元治1年（1864）・年未詳
合　計		499	1295	

「反古帖」（府中市猿渡家文書　府中市郷土の森博物館寄託）
書型：竪23.5～23.7cm　横16.2～16.7cm
装丁：四つ目綴じ　表紙：無地　砥粉色
項目と件数：「老中申渡」など大きく括れるものを項目、その中に含まれる「任命」「免職」などの個別情報を件数とした。

装丁から短時間に整理されたとみられる。

次に「反古帖」の書誌的概要を表1で示す。記録されている情報は延宝三年（一六七五）から慶応四年までの一九三年間、三五年分と年不詳分である。書型は竪約二三センチメートル、横約一六センチメートル。丁数は最少二八丁から最多六七丁。そのうち「反古帖　二十」は白紙が三二丁綴じられている。

「反古帖」の一から二は、近世前期から中期の朝鮮、琉球との交流や神社の神階に関する情報、また歌会の記録などである。三は天保年間のアヘン戦争、近海に出没する異国船や海防に関するものである。四以降は、幕末の情報が主に記録されている。

情報は、四四九項目一二九五件。項目は一括りの文書、件数とはその中に含まれる個別の情報とした。例えば「老中申渡」が項目で、その中の「任命」「免職」など個別の情報を件数とした。

各冊子は、「反古帖　五」の「土州漂客奇談」のように一項目一件のものや、「反古帖　十四」の嘉永七年（一八五四＝安政元年）正月の「老中申渡」では異国船渡来に関わる申達など九六件が含まれているものもある。

情報の年代で一番古いものは、「反古帖　二」の延宝三年「慈眼大師三十三回忌追善三十首短冊之和歌」である。一番新しいものは「反古帖　四」の慶応四年東征軍の沙汰・申達と上申である。記録の順番は必ずしも年代順にはなっていない。また「反古帖」全体も編年ではない。

表2は「反古帖」の情報を年代別に並べ、内容を幕府関係・朝廷関係・東征軍・猿渡家・その他の五つに大分類し、さらに二〇に中分類した。分類項目と概要は以下の通りである。

【幕府関係】

「沙汰・申達」嘉永二年「五島、松前築城の達」が初出。老中や大目付などが出した沙汰や申達。

「異国船対応」嘉永二年「渡来異国船へ申聞かすこと」が初出。嘉永六年以降渡来した異国船の位置情報や沿岸警備体制など。

「外交文書」正徳四年（一七一四）「琉球慶賀使関係」が初出。朝鮮通信使や嘉永六年以降の諸外国との条約文など。

「上申」享保六年（一七二一）「山下幸内上書」が初出。幕府へ対して出された上申書。

「触書」万延元年（一八六〇）「改元触」が初出。幕府の触書。

「書留」享保四年「薩摩藩へ清国滅亡時の経緯問合」が初出。騒動や事件の顛末がわかる記録。

表２　年代別内容別分類

（　）内は％を示す

大分類	幕府関係							朝廷関係				東征軍		猿渡家			その他					合計
中分類／年代	沙汰申達	異国船対応	外交文書	上申	触書	書留	和歌漢詩文	宣命勅書	関白申達	上申	和歌漢詩文	沙汰申達	上申	上申建白	祝詞	著作	書付写書留	風聞書	著作	和歌漢詩文	白紙	
延宝3年											1											1 (0.1)
正徳4年			1																			1 (0.1)
享保４年						1																1
同 ６年				1																		1
同 ８年								3														3
小計				1		1		3														5 (0.4)
寛政１年																	2					2 (0.2)
文化５年																			1			1
同 ８年			1																			1
同 13年						1																1
小計			1			1													1			3 (0.2)
文政7年											1						1					2 (0.2)
天保６年																	1					1
同 11年				2																		2
同 12年						2		1										1				4
同 13年																			2			2
同 14年						1																1
小計				2		3		1									1	1	2			10 (0.8)
弘化１年			1																			1
同 ２年			1																1			2
同 ３年								1														1
小計			2					1											1			4 (0.3)

嘉永２年	2	1		3															3			9
同３年				1																		1
同４年								1			1											2
同５年			3			1																4
同６年	2	51	5	15		13	1	6			1			1				3	1			99
小計	4	52	8	19		14	1	7			2			1				3	4			115 (8.9)
安政１年	2	121	6	2		10		1										5	2	1		150
同２年		1																1				2
同３年																				1		1
同４年		2	3	2		1				1								1				10
同５年	19	7	4	1		5		4	1	8				2			1	5				57
同６年	6			4		3	1										1			1		16
小計	27	131	13	9		19	1	5	1	9				2			2	12	2	3		236 (18.2)
万延１年					2	3		2		1							2	10				20 (1.5)
文久１年		2				3				1						1		2				9
同２年	365		1	16		39		6	2	6	1						10	96		2		545
同３年	37	1	6	8	17	24	1	1	5	6	2				1		15	79		1		203
小計	402	3	7	24	17	66	1	7	7	13	3				1	1	25	177		3		757 (58.4)
元治元年	3			1		1		2	1	4							2	5				19 (1.5)
慶応4年												30	15									45 (3.5)
3月																		3				3 (0.2)
年不詳	1			1		6	10				1				1		7	11	21	12	1	72 (5.5)
総計	437 (33.7)	186 (14.3)	32 (2.5)	57 (4.4)	19 (1.5)	114 (8.8)	13 (1.0)	28 (2.2)	9 (0.7)	27 (2.1)	8 (0.6)	30 (2.3)	15 (1.2)	3 (0.2)	2 (0.2)	1 (0.1)	42 (3.2)	222 (17.1)	31 (2.4)	18 (1.4)	1 (0.1)	1295 (100)
	858 (66.2)							72(5.6)				45(3.5)		6(0.5)			314(24.2)					1295 (100)

「和歌・漢詩文」嘉永六年「徳川斉昭等の和歌」が初出。大名・旗本などが詠じたもの。

【朝廷関係】

「宣命・勅書」享保八年「人麻呂神社神階宣命」が初出。宣命・勅書・太政官符・御教書など。

「関白申達」安政五年「幕府への問」が初出。関白の申達。

「上申」安政四年「九条関白へ上書」が初出。朝廷などに出された上申書。

「和歌・漢詩文」延宝三年「慈眼大師追善和歌」が初出。天皇や公家などが詠じたもの。

【東征軍】

「沙汰・申達」慶応四年のみ。東征大総督府などが出した沙汰・申達。

「上申」慶応四年のみ。東征軍あてに出された官軍諸藩からの上申書。

【猿渡家】

「上申・建白」嘉永六年猿渡盛章の「異国船渡来之儀ニ付奉申上覚（下策儀案）」と容盛の安政五年の建白書。

「祝詞」文久三年「将軍上洛祝言」が初出。猿渡家が奏上した祝詞。

「著作」文久元年猿渡容盛著「御殿地故事」。

【その他】

「書付写・書留」寛政元年の「太宰府碑銘」が初出。騒動や事件の顛末がわかる記録など。

「風聞書」天保一二年「清国騒動伝説書」が初出。京や江戸での政治動向や事件に関する見聞、聞取り、落書、貼紙など。

「著作」文化五年赤松則陽著「海防弁」が初出。海外との交流や海外情勢に関わる著作。

「和歌・漢詩文」安政元年「前田夏蔭作詩歌文」が初出。幕府関係や朝廷関係を除いたもの。

「白紙」年不詳。冊子の体裁を成しているが、なにも書かれていないもの。

大分類は、【幕府関係】の情報が八五八件で、全体の六六・二パーセントである。そのうち三桁の件数があるのは「沙汰・申達」「異国船対応」「書留」の三項目。さらに「沙汰・申達」のうち文久二年が三六五件で、八三・五パーセントを占める。【朝廷関係】は「宣命・勅書」と「上申」を合わせると五五件で、七六・四パーセントになる。【東征軍】は慶応四年の六月と七月に集中し「沙汰・申達」が三〇件、六六・七パーセント

である。【猿渡家】は盛章の上申以外は容盛と盛愛により作成されたものである。【その他】は全体の二四・二パーセント。「風聞書」が文久二・三年合わせて一七五件、七八・八パーセントと、この二年に集中している。

中分類で三桁を超えたのは幕府関係の「沙汰・申達」が四三七件、その他の「風聞書」が二二二件、幕府関係の「異国船対応」が一八六件、幕府関係の「書留」が一一四件、合計九五九件で全体の過半数を超えている。

年代で三桁の件数があるのは、文久年間（一八六一～六三）の七五七件。安政年間（一八五四～五九）の二三六件。嘉永年間（一八四九～五三）の一一五件となり、合計で一一〇八件、全体の八五・五パーセントを超える情報量であり、とくに文久年間の多さは顕著である。

さらに、この三年代を含む嘉永二年から慶応四年までの一七年分を見ると合計は一一九二件、全体の九二パーセントにあたる。個別年代で一番件数が多いのは、文久二年の五四五件、次は文久三年の二〇三件、安政元年の一五〇件、嘉永六年の九九件と続き、四年分の件数合計は一〇〇〇件である。

この四年分に記録されている情報の中から主なものを挙げると以下の通りである。

【嘉永六年】六月三日の浦賀奉行の異国船来航届書が最初で、以後異国船に関わる情報が記録された。七月、アメリカ国書への対応を幕府が諸大名などに諮問したが、その上申書の一部が記録されている。一二月は、プチャーチンの長崎再来航の届書などである。

【安政元年】年を跨いでプチャーチンとの交渉記録。一月一日ペリーの再来航。三月、日米和親条約の条約文。七月、日英和親条約の締結。海防問題参与の水戸斉昭が毎日江戸城の奥へ登城し、時に老中と面会した記録など。

【文久二年】坂下門外の変。四月は、薩摩藩島津久光の上洛。六月、勅使下向。七月、幕政改革。[18] 都の天誅事件。八月は、生麦事件。京都発信の風聞書、和宮降嫁や攘夷決行に関するものなどである。

【文久三年】三月の将軍家茂上洛に伴う大名などの配置と加茂社行幸。四月、石清水八幡宮行幸。七月、薩英戦争。八月は、天誅組の乱、八・一八の政変。前年と同じく風聞書が多くある。

近世前期・中期の記録には、家職を意識してか、神社に関するものや歌会に関するもの、後期には対外問題に関するものが多く、幕末・維新期には諸外国との交渉や尊王攘夷運動、幕政

改革などの政治・社会情勢に関わる情報が多い。

土浦の商人で国学者の色川三中が[19]、黒船来航を契機に政治情報などを書き留めた「片葉雑記」[20]には、黒船の状況や幕府の対応だけでなく、江戸市民の反応や物価高騰なども書き記しているが、「反古帖」には物価高騰や治安への懸念など、庶民生活への影響を窺い知ることができる情報は極めて少ない。「反古帖」の情報は幕末の対外情勢と国内動向が大半を占めている。

幕末維新期の情報を海外情報・民衆の情報世界・政治情報の視点でまとめた『幕末維新論集10　幕末維新と情報』（解説保谷徹編　吉川弘文館二〇〇一年）の成果を参考にするならば、「反古帖」は海外情報と政治情報が主体のものであるといえる。

「反古帖」の大部分が書留められた嘉永二年から文久三年の間は、猿渡家が社領の配分や相続などについて社家や社僧と争いをしていた時期である。安政六年に六所宮禰宜の織田筑後が、社家や社僧と共に神主領の配分について神主を寺社奉行所へ訴えている。翌年二月いったんは示談となり、双方が吟味取下げの請書を提出したが[21]、示談当日に筑後の息子兵部が[22]、同内容で別の訴状を提出し再び吟味が始まった。その後、文久元年十一月に示談が成立、翌月双方が吟味の取下げ願を提出して収拾した[23]。

盛章が六〇年という長きにわたる神主職を譲り引退したのは文久二年、翌年に死去している。後を継いだ容盛は元治元年に年中行事や神事の改革を行い、祭礼行事から社僧を排除した。

猿渡家は、近世前期から情報収集を行っていたが、幕末・維新期は、国内の政治・社会情勢に関わる情報を主に収集している。猿渡家が自家の政治的地位を意識してのことであろう。もちろん海外情勢などにも関心を持っているが、それ以上に政治社会の変動に注意を払っている姿が見えてくる。

二　情報の入手先

嘉永六年（一八五三）六月、アメリカ合衆国のペリー率いる艦隊が浦賀沖に姿を現したことは、多くの日本人に大変な驚きと恐怖をもたらした。近世における海外情報は、唯一の窓口である長崎を通して入ってきた。その情報は、幕府による管理のもと幕閣など一部で把握するに留まっていたが、近世後期には外国船が全国各地に出没し、その目撃情報などが広まり、またアヘン戦争の結果が海外情勢への関心を高めた。

一九七〇年代には蘭学や洋学史研究の成果によって、海外情報が長崎通詞から懇意の大名家へ伝わっていること、また蘭学

者を介して地方へ伝わっていること（宮地正人『幕末維新風雲通信―蘭学者坪井信良兄宛書簡集―』東京大学出版会一九七八年）など、中央と地方が情報を共有していたことが明らかとなった。八〇年代になると、政治史の視点から豪農や商人の情報の収集目的などの研究が進み（宮地正人『幕末維新期の文化と情報』四頁、名著刊行会一九九四年）、近年では、地方で記録された海外情報の内容について比較検討も行われ、収集した家を取巻くネットワークなどが明らかにされた（岩田みゆき「幕末の対外情報と在地社会―「風説留」から見る―」（『講座明治維新　第1巻　世界史のなかの明治維新』明治維新史学会編　有志舎二〇一〇年）。

幕末に多くの政治情報を収集した猿渡家は、情報をどこから入手したのであろうか。「反古帖」には情報を猿渡家へもたらした人物が特定できる記述が散見される。表3は情報提供者を情報の多い順に並べた。居住地は情報提供時のもので、関係は盛章、容盛との関係を示した。

提供者は二〇名、関係の内訳は縁戚、地域文化人、六所宮関係、縁故、友人、同宿、不明である。

縁戚は五名、西野新治については前述したが、文久二年容盛が再縁した妻の養父でもある。

奉願覚

水戸殿家来

西野新治養女

右私妻ニ縁組仕度奉願候、以上

武蔵六所神主

文久二戌年九月　猿渡左衛門

寺社

御奉行所

（文久二年九月「神主縁組願控」）[24]

堀内循助[25]は母方のいとこの夫で、「類題新竹集」に和歌二七首が掲載されている。[26]

「安政四巳年十一月朔日　親類書　西野氏へ遣ス」（端裏書）

近江守惣領

猿渡　豊後

武蔵六所宮神主

一父　猿渡近江守

御書院番与力相勤申候

一母　富永権兵衛氏娘

武蔵六所宮神主

一祖父　猿渡信濃守死

牧野越中守家来
一祖母　藤田義山死娘死
豊後実子
一惣領　猿渡【浪】涛之丞
近江守三男
一弟　猿渡政之進
小普請方仮役
一従弟女　城　六郎妻
母方
御留守居番与力
一叔父　富永権兵衛
権兵衛惣領
一従弟　富永保之助
藪増次郎家来
一従弟　大野作助
池田甲斐守家来
一従弟　中村新蔵
戸田山城守家来
一従弟　田中五太夫
松平出羽守家来
一従弟女　堀内循助妻

右之通ニ御座候
安政四年十月　猿渡豊後
容（花押）

（安政四年一一月「猿渡家家族親類書」[27]）

城六郎[28]は容盛の父方のいとこの夫[29]である。また城家は盛章の弟の養子先でもある。

寛政三亥年私次男猿渡六太郎儀、御徒頭松平舎人殿組頭相勤候城彦右衛門方江養子ニ差遣候（後略）

（文化二年八月九日「公私用覚」[30]）

富永保之助[31]は母方のいとこ[32]である。

木邨経次郎[33]は御家人木村條右衛門の息子で、容盛の父方のいとこである。

木村條右衛門儀病気ニ付、伴経次郎江御番代奉願候処、経次郎儀は難相成、身寄御番代可奉願旨被仰渡（以下略）

（年不詳「木村條右衛門跡御番代願ニ付口上覚」大国魂神社文書ワ271）

私娘、此度御書院御番頭水野石見守殿与力木村十三郎方江縁組仕候

（文化二年八月九日「公私用覚」）

地域文化人は三名で、医師の内藤椿斎。[34]

御家人下華山[35]は若年寄支配下の御厩方役人で、府中宿東方に拝領屋敷があった。通称与市郎、文久二年に家督を息子の獲之助に譲り隠居後は楽水と名乗った。「類題新竹集」に和歌三二首[36]が掲載されている。

奉願候覚

武州多摩郡

馬医心懸

一高五拾俵弐人扶持　下　与市郎

戌六拾七歳

実子惣領

下　獲之助

戌三拾四歳

（中略）

私儀風邪之処薬用仕罷在其内流行暴瀉之症兼、町医者本多覚庵内藤椿斎両人之薬用種々仕候得共、快気之程難計、若私相果候ハヾ、実子惣領獲之助江跡式被下置（以下略）

（文久二年「実子惣領跡式仰付願」馬医心懸下家文書Ｄ１１１）

下新井村名主森田七郎左衛門は[37]「類題新竹集」に和歌一首が[38]掲載されている。

六所宮関係は六所宮禰宜織田筑後の息子三名で、幕府奥医師の伊藤貫斎[39]は二男。水戸藩医師の織田雅楽[40]は長男。織田兵部は三男で禰宜職を継ぎ、「類題新竹集」に和歌二〇首[41]が掲載されている。

縁故は三名で、布野雲平、[42]間瀬和三郎。[43]清水広平[44]は下　華山の四男。安政四年清水寿作家の養子となる。

覚

御裏御門御切手番

江連小市右衛門組同心

清水寿作

一右之者江此度私四男広平儀養子縁組仕度（以下略）

（安政四年一二月「養子縁組覚」馬医心懸下家文書Ｄ９４—２）

友人は一名で、鶴峯戊申。[45]同宿は一名で信州松本人。[46]不明は四名で、山下経次郎[47]は「御書院番頭土岐大隅守御頭与力山下経次郎（以下略）」、[48]知雉、[49]三河国雲母庄郡野平林住人内藤弥助、[50]月斉[51]となる。

縁戚は身分不明の木邨啓次郎を除くと藩士や御家人であり、木村も生家は御家人である。地域文化人は医師、名主、御家人

である。六所宮関係は医師二名、神職一名。縁故は直接の交流を確認できないが、縁戚の西野や堀内などを通じて間接的に情報を入手した人物。友人は国学者の鶴峯戊申。同宿は江戸出府の折に交流を持った人物である。

身分を見ると武士が九名、医師三名、学者二名、神職一名、村役人一名、不明四名である。

情報提供の時期はまちまちであるが、これは提供者の事情、立場などを表していると考えられる。また情報の内容も同様で、西野新治は水戸藩内と山陵調査で上京中の情報。内藤椿斎は風聞など。堀内池堂は異国船渡来、桜田門外の変など。下華山は夷人応接など、布野雲平は京都や横浜などの風聞である。

記載がある提供者は以上であるが、『六所宮神主日記』には富永氏の時候の挨拶状に寺社奉行の交代が記してある。[52] また、社務などで寺社奉行所を訪れた際に直接触書などを見せられることもあった。

文久三亥年十一月御用番松平摂津守殿御達

先般衣服之制度御改革被仰付候処、以来前書之通熨斗目長袴等着用可致間被仰出候

一前々熨斗目或は服紗小袖又は白帷子長袴着用之廉々は以来前々之通着用可致候

但正月八日より平服之事

一正月六日装束

一九月九日御礼之節前々の通花色小袖たるへく候

右之趣万石以上以下共不洩様可相触候

十一月

右【十一月十四日相触】（挿入）御書付十二月十七日松平摂津守殿ニ而拝見

寺社方浅井徹三

（文久三年「公用留記」『府中市郷土の森博物館紀要第20号』）

猿渡父子が収集した政治情報の大半は縁戚や地域文化人、また寺社奉行所の役人などを通じて入手したものである。情報は人間関係によって、つまり人的ネットワークにより伝達されていた。

近世社会において情報は開示されるものではなく、統制されるものであると考えられてきたが、猿渡家が入手した情報は、幕臣、陪臣である縁戚や縁故などの武士階級からもたらされたものが多い。猿渡家は武士階級に繋がる家と考えられていた。枠組みの中であれば統制は行われないのである。

表３　情報提供者及び書写者等一覧

情報提供者	書写者	反古帖	年　代	中項目	書写年月日・入手経緯	身　分	居住地	関　係
西野松寓		二十四	安政5.8.19	その他書付	松寓日記中抄録	水戸藩士 国学者	江戸・京都	縁戚
松寓主人		三十	年不詳	その他和歌	云			
西野新治宣明		三十	年不詳	その他和歌	当中納言殿へ奉れる			
西野松寓		三十七	（文久3.）8.29	風聞	西野松寓翁書中			
西野松寓		三十八	（文久3.）3.24	風聞	水府西野氏書翰			
西野松宇		三十八	（文久3.）4.□	その他書留	京師書翰			
西野新治		四十一	（文久4.）2.	その他書留	戸田大和守より書翰			
内藤椿斎		十	（安政1.）2.	幕府上申	（安政1.）2.伝写ノ本ヲカリテ写之	医師	本宿村	地域文化人
内藤椿斎		二十三	安政5.6.10	風聞	（安政5.）7.7伝写本ヲ写ス			
椿斎		二十七	年不詳	その他書付写	写しとり余（盛章）に贈れる			
内藤椿斎		二十七	年不詳	その他漢詩	此書写			
内藤椿斎		二十七	文久1.5.25	風聞	文久1.6.10聞書を書とむ			
内藤椿斎		二十七	文久1.5.15	風聞	此二ヶ条写取			
堀内池堂		七	嘉永6.6.	風聞	堀内池堂聞書　同月六日合原氏（浦賀与力合原猪三郎）より聞る処を猶又同家へ聞合校正す	松江藩士	赤坂中屋敷	縁戚
堀内団輔		十二	嘉永6.	異国船対応	写し越候御書付写之			
堀内循助		十五	嘉永7.7.17	風聞	崎陽より文音の序ニ贈ル処を筆記して余ニ示したる也			
雲州堀内循助		二十五	安政7.3.3	その他書付	雲州堀内循助方手控筆記			
雲州藩	猿渡容盛	三十八	（文久3.）	風聞	4.11雲州藩にて写ス			

下　華山		二十四	（安政6.）	幕府漢詩	下　華山持来テ示ス	御家人	府中宿	地域文化人
下　華山	盛章	二十五	万延1.	詔書	下　華山処得写、点は盛章所考也			
下　華山		二十五	年不詳	風聞	下　華山所得写之			
下氏		二十五	年不詳	風聞	下氏写本			
下　華山	樅園猿渡盛章	二十六	（嘉永7.1.4）	幕府書留	万延1.8.23　下　華山之本書写畢七十一翁樅園猿渡盛章雇鬟隷自写			
雲州蘭学者		三十八	（文久3.）2.27	風聞	書取也	松江藩士 蕃書調所教授	江戸	縁故
雲州藩蘭学者		三十八	（文久3.2.6）	風聞	書取也			
雲州藩蘭学者布野雲平		三十八	（文久3.）3.7	風聞	横浜より江戸邸へ出ス書翰			
布野雲平		三十八	（文久3.）	風聞	書取			
雲州蘭学者		三十八	（文久3.）	風聞	書取			
山下経次郎		三十八	（文久3.）4.14	その他書留	京都発書状之内山下経次郎写書也	御家人	京都	不明
山下経次郎		三十八	（文久3.）4.7	風聞	京都より書き送る			
知雉		一	享保8.2.1	朝廷太政官符	『増益弁ト抄俗解下』より抄録（以下略）	不明	不明	不明
信州松本人	樅園主人	二	享保6.	幕府上申	天保6.7.於東都浜松街之旅寓借得書写訖	不明	信濃国松本	同宿
城　六郎		九	（嘉永6.6.4）	異国船対応	6.26城　六郎方ニ而写ス　此書取何方より出候哉不分明也	御家人	下谷	縁戚
富永氏		九	（嘉永6.）6.7	異国船対応	6.25富永氏ニ而写ス　此書取仕第之手ニ出候哉不分明也	御家人	青山百人町	縁戚
内藤弥助	盛章	十一	（安政7.4.8）	幕府書留	文久1.8.17写之	不明	三河国雲母庄郡野平林住人	不明
伊東貫斎		十二	（嘉永6.）9.17	異国船対応	松前家屋敷へ聞合候処返書差遣し候間写し置候事	幕府奥医師	江戸	六所宮関係

織田雅樂		十五	（嘉永7.）2.10	その他書留	2.14長門寛司聞書伝写して贈る処也	蘭方医	江戸薬研堀	六所宮関係
木邨経次郎		十五	（嘉永7.）	その他書留	伝写	不明	不明	縁戚
月斉		二十三	安政5.4.	朝廷御教書	（安政5.）7.21写シ来ル	不明	不明	不明
森田七郎左衛門		二十七	万延1.9	その他書付	万延1.11.11　梅田兵衛主被送所也	国学者・名主	下新井村	地域文化人
織田兵部		二十七	（文久1.）5.27	風聞	自江戸写来テ余ニ示ス	六所宮禰宜	府中宿	六所宮関係
間瀬和三郎（戸田大和守忠至）		三十二	（文久2.）	幕府書留	山稜御取締御用向二付当時在京8.19付	宇都宮藩家老山稜奉行	京都	縁故
清水広平	樅園	三十九	（文久3.）7.10	その他書留	下　与市郎宛書通之写	御家人	江戸	縁故
鶴峯（戊申）翁	樅園老圃	十八	（安政1.）	著作	安政3.9.以本書写訖	国学者・水戸藩士	江戸	友人
	猿渡	一	文政7.9.21	朝廷和歌		六所宮神主	府中宿	
	盛章	一	正徳4.	外交	古記録中抄出書写之畢			
	樅園	二	（天保6.）	その他書付写				
	樅園老人	三	弘化2.5.	その他著作				
	樅園老圃	六	嘉永2.8.	幕府上申	嘉永3.6.写			
	盛章	八	（嘉永6.）	幕府上申				
	猿渡盛章	八	嘉永6.12.	猿渡上申	擬策下案　寺社奉行宛			
	樅園老樵	十	嘉永6.10.15	外交				
	樅園	十八	（安政1.）	その他著作	安政2.9			
	樅園老人	二十三	万延1.	風聞	万延1.8.12得之			
	盛章	二十五	3月	風聞				
	樅園盛章	二十五	（万延1.）	風聞	（万延1.）12.雪中忍厳寒老華写之　樅園盛章誌			
	樅園	二十五	年不詳	その他著作	万延2.2.樅園抄畢			

猿渡容盛	二	延宝3.10.2	その他和歌	文政10.12.於東都客舎書写畢		
猿渡容盛	二十二	安政5.1.	猿渡建白			
猿渡容盛	二十二	安政5.2.	猿渡建白			
猿渡容盛	二十三	万延2.2.29	猿渡著作			
容盛	二十九	（文久2）6.朔	沙汰申達	文久2.7.20写同26得一本対校畢　容盛		
容盛	二十九	文久2.5.8	朝廷勅宣	文久2.7.20夜拝写		
武野樵夫	三十	文久2.8.1	風聞		六所宮神主	府中宿
猿渡容盛	三十二	（文久2.）	その他書付写	（文久2.11.21）赤坂旅寓（出雲藩中屋敷）ニて認めス		
容盛・盛愛	三十四	文久3.2.15	猿渡祝詞			
容盛	三十八	文久3.3.11	風聞	武蔵国人容盛誠惶誠恐頓首百拝		
容盛	四十	（文久3）	幕府書留			
武野樵夫	四十一	元治1.1.10	風聞	元治元.4.10赤坂旅寓（出雲藩中屋敷）ニおいて		
東陵老園	五十	年不詳	風聞	嘉永7.2.筆記	不明	不明
東陵		嘉永6.10.	その他著作	筆記		不明

三　情報の提供

猿渡家は入手した情報を他家へ提供したのであろうか。残念ながら史料の制約があり猿渡家から情報が提供されたかどうか、つまり相互に情報の伝達が行われていたのか把握できなかった。

情報数の多い内藤椿斎の家は、父重英で五代目となる。本宿村の組頭や百姓代を務めた家で、曾祖父常明、祖父重喬[53]共に医師であり、学問文芸に長じ猿渡家との交流は深く、内藤家の蔵

書には猿渡家の蔵書の写本があるが、その中に「反古帖」に記載されている情報は見当たらない。

情報の入手先ではないが、猿渡家が情報源となっている事例を紹介する。

猿渡家と地域文化人として、また医師と患者としても交流のあった武蔵国多摩郡下谷保村の名主で医者の本田覚庵[54]の「日記」に万延元年（一八六〇）三月三日の桜田門外の変の一報が記録されている。三月五日覚庵の弟子の為吉[55]（のち本多雖軒）が府中神主宅へ往診に行った際、三日に井伊直弼が八人の浪人体の者に襲撃され、浪人五人が死亡し、井伊家家臣の被害は分からないというものである。

（万延元年三月）

（前略）

五日　雨雪終日軽寒、去ル三日彦根侯登城帰り除（途カ）中ニて浪人躰之者八人程ニて乱妨いたし、八人之内五人早死、三人ハ逃去り候由、彦根侯家来早死其外何人ニ候者瀉（ママ）未だ不知レ、右之由昨夜為吉府中神□（主）より承り来り候、（後略）

（「万延元年正月～文久元年十二月」『本田覚庵日記』くにたち図書館一九八九年）

さらに十日には出所の明記はないが、井伊家の被害状況届や襲撃した浪人たちの氏名、生死などの情報が記録されている。「反古帖」には桜田門外の変に関わる情報は九件あり、内容は事件の経緯をまとめた書付や横浜で板刻されたもの、井伊家家老の届書、浪士の書置きなどである。本田家に最初に伝わった情報は書き記されたようなものではなく、伝聞程度のものである。しかし、十日の情報は「反古帖」と重複する部分があり、書写された情報であろう。また本田覚庵日記には、文久二年正月二四日榎戸新田へ往診に行った弟子の文得が、坂下門外の変について聞き込んで来たことが記録されている。

もう一点は、猿渡盛章が嘉永六年一二月に寺社奉行宛に提出した「異国船渡来之儀ニ付奉申上覚（儀策下案）」の写し[56]である。これは小島政敏[57]が盛章の門弟であることから書写されたと思われる。政敏は「類題新竹集」に和歌六首[58]が収載されている。

なお本多雖軒は文久元年（一八六一）に退塾後、府中宿で慶応元年（一八六五）まで開業しているが、府中宿在住中に「神武館造立趣意書」[59]を書写している。同文が「反古帖　四十一」にある。猿渡家から雖軒に伝わったのか、その逆なのか情報の出所は不明である。雖軒は「類題新竹集」に和歌一首[60]が収載さ

れている。

猿渡家からの情報提供について見てきたが、猿渡家にとって幕府の人事や制度の改正を知ることは家を守るために必要なことである。しかし、地域では猿渡家のように幕府内部の情報を集めなくてはならないような事は、極めて僅かなのである。猿渡家と交流がある周囲の家々は詳細な政治情報を必要とはせず、相互に情報を共有する必要もなかった。

おわりに

本稿では猿渡家が「反古帖」と名付け編集した情報がどのような内容であったか、収集時期、入手先などを明らかにし、武蔵国屈指の神社の神主であり、国学者であり、政治的意識が高い猿渡家の社会情勢や政治情勢への関心がどこにあったのか、また情報の収集から見える交流を明らかにすることを目的とした。

猿渡家は武蔵国総社六所宮の神主家として、古くから和歌や神社の神階などの古文書を写し保存してきた。「反古帖」四十一冊に記されている情報は、こうした古くから集めていたものと、アヘン戦争を契機として海外情勢にも関心が寄せられ、ペリーの浦賀来航および翌年の再来航とロシアのプチャーチンの来航などの対外情報、幕府の文久改革および尊王攘夷運動による政治・社会の混乱など、幕末・維新期の主に幕府に関わる情報が記録され、猿渡家が政治的地位を意識していることがよくわかる。

政治や社会の変動に注意を向けている姿が見えてくる。「反古帖」の情報は、五百石の朱印地を与えられ、毎年正月江戸城に登城し、拝賀独礼を行う家柄を維持していく必要性、そして政治的地位から集められたもので、物珍しさや困窮する庶民生活を記録するためではない。

情報の入手先は縁戚・地域文化人・縁故などの武士、医師、学者、六所宮関係などである。明記されていないが寺社奉行所の役人からも幕政改革など多くの情報を得ている。

また入手した情報は、幕臣、陪臣である縁戚や縁故などの武士階級からもたらされたものが多く、猿渡家が武士階級に繋がる家だと考えられ、枠組みの中であれば情報統制など必要ないという認識が提供側にあったということがわかる。

「反古帖」に集められた情報は他家、特に地域に提供された事例がわずかであることから、猿渡家が求め記録した情報は、地域社会が求めるレベルの情報ではない。このことは入手した

情報を他家と共有していなかったことからも明らかである。つまり情報は、収集する側の政治的地位や、そこから派生する情報の利用価値などによって重要度が異なり、取捨選択が行われるのである。

猿渡家の交流を見ると社会属性に関わるものと、学問・教養に関わるものがあることが見えてきた。

最後に、情報を「反古帖」にまとめた意味を考えてみたい。明治となり国は世界に開かれ、政治体制が変わったことで、旧体制下では家の維持に必要であった情報はその価値を失ったが、国学者らしく歴史史料としてまとめ、古写本などと同様に収蔵したのではないだろうか。

本稿では、情報を猿渡家へ提供した地域文化人が、その情報をどこから入手したのか、なぜ入手したのかなど地域文化人の情報収集について検討できなかった。今後の課題としたい。

註

（1）『六所宮神主日記』解説（府中市教育委員会一九八八年）

（2）『國學院大學大学院紀要—文学研究科—二〇一三年度　第四十五輯』國學院大学大学院二〇一四年）

（3）『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』二一八　府中市教育委員会一九八四年）

（4）前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』五三

（5）前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』解説

（6）『国学和学研究史料集成　第七巻　近世に於ける神祇思想、神道思想とその研究者たち』収載（クレス出版二〇〇八年）

（7）「御条目注文別記・社職家筋世代之部」（前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』二四六）

（8）寛政二年（一七九〇）—文政一二年（一八二九）。漢学者。江戸生。萩原大麓の長男。通称駒太郎、英助。名を善韶。字を文華。号楽亭、嵩岳（嶽）。薬研堀住。古今を博綜し、明清考証の諸書も究めた。（『改訂増補漢学者総覧』汲古書院二〇一一年、『江戸文人辞典』東京堂出版一九九六年）

（9）天明三年（一七八三）—弘化四年（一八四七）。武蔵国多摩郡小山田村生。国学者。通称寅吉、寅之助、仁右衛門、庄次郎、将曹、六郎右衛門。字文儒。号薬山堂、玉河亭、松屋、知非斎、報国恩舎、擁書倉。漢学を古屋十郎に学び、享和元年（一八〇一）村田春海に入門、和学を学ぶ。文化三年（一八〇六）見沼通船方高田本孝の養子となる。文政八年（一八二五）家督を息子に譲り、小山田と改姓。天保二年（一八三一）水戸斉昭に出仕。平田篤胤、伴信友とともに天保の国学の三大家と評される。（『国学者伝記集成』一二二七頁　名著刊行会一九七八年）

（10）遠藤吉次「幕末における対外認識と猿渡盛章の「擬策下案」」（『東国民衆史』第七号　東国民衆史研究会一九八二年）

（11）『武蔵総社大国魂神社史料　第二輯』（武蔵総社大國魂神社社務所一九五一年）

（12）容盛は「小山田へ入門する直前に平田篤胤のもとを訪れた」（阪本健一『明治神道史の研究』国書刊行会一九八三年）といわれ、さらに「私淑していた」（渡邊國雄『神道思想とその研究者たち』金星社一九

五七年）ともいわれている。国立歴史民俗博物館が二〇〇三年から二〇〇七年に行った平田家文書調査の成果によれば、平田家と容盛の交流は、天保二年（一八三一）二月二五日容盛が初めて平田家を訪れたことから始まる。同年は二回、翌三年は一回、安政四年（一八五七）二回、同五年書状二通を含めて三回、万延元年（一八六〇）一回、年不詳の書状一通の合計一〇回である。（『国立歴史民俗博物館研究報告第一二八集平田国学の再検討（二）』二〇〇六年、『平田国学の再検討―篤胤・鋭胤・延胤・盛胤文書の資料学的研究―』二〇〇七年、『国立歴史民俗博物館研究報告第一四六集平田国学の再検討（三）』二〇〇九年、国立歴史民俗博物館研究報告第一五九集平田国学の再検討（四）」二〇一〇年）

（13）享和二年（一八〇二）―明治一六年（一八八三）。水戸藩士。国学者。弘道館訓導。通称新六、新治。字叔和、諱宣明。号松宇。のち西宮と改姓。小山田与清に学ぶ。藩主斉昭の命で小山田与清、鶴峰戊申、久米博高らと「八州文藻」「明倫歌集」の編纂に従事、天保十年（一八三九）『常陸風土記』を刊行。明治政府に出仕、明治二年（一八六九）諸陵允に任じられ山陵調査に当る。同四年免職（鈴木暎一『国学思想の史的研究』二二四頁　吉川弘文館二〇〇四年、『幕末維新人名辞典』吉川弘文館一九八一年）。

（14）遠藤吉次「国学者猿渡容盛と二つの建言書」（『府中市立郷土館紀要』九号　府中市教育委員会一九八三年）

（15）安政の地震で校閲を依頼していた中条信礼の許で焼失。その時の心境が歌と短歌の詞書に残されている「安政二年十月二日江戸の地震のさわきに火のわさわいおこりてわかとしころいそしミたりし万葉通の稿本廿余巻やけうせける時悲しみ歎きてよめる歌并短歌」（『六所宮社家歌集』「樅の下枝　下　雑部」収載　府中市教育委員会一九九二年）。

（16）前掲註11同書『武蔵総社大国魂神社史料　第二輯』

（17）橋本好秋、北條時鄰、猿渡盛章、猿渡容盛、篠原善一、中條基之、間宮永好、椿仲輔、伊能頴則、康哉法師（紀淑雄『小山田与清』裳華書房一八九七年）

（18）「文久改革」と呼ばれ、大きな柱は軍制と参勤交代の期間短縮や大名の妻子の江戸住み勝手次第などの大名統制の改革である。「反古帖」に軍制改革の情報は記録されておらず、幕府の年中行事等の簡素化や人事、服制改革が記録されている。

（19）享和元年（一八〇一）―安政二年（一八五五）。国学者。通称桂輔、弥三郎、三郎兵衛。諱英明、号東海、瑞霞園。土浦生まれ。薬種業、醤油醸造業を営む。

（20）中井信彦校注『片葉雑記　色川三中黒船風聞日記』（慶友社一九八六年）

（21）前掲註1同書『六所宮神主日記』一三（府中市教育委員会一九八八年）

（22）生年不詳―明治一二年（一八七九）。六所宮禰宜。六所宮禰宜織田筑後三男。名盛孝、直磨。安政三年父筑後の死去を受けて禰宜に就任。（「御条目註文別記・社職家筋世代之部」前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』二四六）

（23）前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』解説

（24）前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』二一二

（25）生没年不詳。松江藩士江戸詰。通称循助、名池堂、号大門、袖浦。

（26）前掲註2同書「近世後期における武蔵総社猿渡容盛の歌集編纂と武相の歌人」

（27）前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』一八一

（28）生没年不詳。御家人。諱親良。嘉永元年（一八五二）五月二七日御徒明跡へ召抱えられる。安政五年（一八五八）五月二日箱館奉行支配調役並出役。文久元年（一八六一）二月二一日同奉行支配支配調役並役

蝦夷地誌。（『改訂新版　江戸幕臣人名事典二巻』新人物往来社一九九七年）

(29) 前掲註3同書『大国魂神社文書Ⅰ　神職の部』一八一

(30) 前掲註1同書『六所宮神主日記』六

(31) 生没年不詳。御家人。慶応元丑年七月晦日父保之助家督被下置候（中略）祖父権兵衛御留守居番与力、父保之助右同断、　慶応元丑年七月晦日父家督被仰付、如父時小普請組罷成　同年八月□肝煎被仰付候（『改訂新版　江戸幕臣人名事典三巻』新人物往来社一九九七年）

(32) 前掲註1同書『六所宮神主日記』六

(33) 生没年不明。御家人木村條右衛門息子。

(34) 生年不詳－文久三年（一八六五）。医師。通称を鼎介、元寛、愛人、重鎮。号を椿斎、有原堂、懐安、蛻庵、陶斎、耕耘。武蔵国多摩郡本宿村の内藤治右衛門重英の子。（『本宿小野宮内藤治右衛門家文書目録（2）』解題　府中市郷土の森博物館二〇一四年）

(35) 生没年不詳。御家人。通称与市郎、楽水。諱直文。号華山。下与一郎直年の子。若年寄配下の馬医心掛。五〇俵二人扶持。武蔵国多摩郡府中宿に拝領屋敷。（『改訂新版　江戸幕臣人名事典二巻』新人物往来社一九九七年）

(36) 前掲註2同書「近世後期における武蔵総社猿渡容盛の歌集編纂と武相の歌人」

(37) 文政四年（一八二一）－明治一四年（一八八一）。国学者。武蔵国入間郡下新井村名主。新座郡館村宮原正房三男。森田氏養子。通称七郎左衛門、名道興。道依。師は本居内遠、平田鉸胤、鶴峯戊申。著書『俗説弁』（『和学者総覧』汲古書院一九九〇年、『埼玉人物事典』　埼玉県一九九八年）。

(38) 前掲註2同書「近世後期における武蔵総社猿渡容盛の歌集編纂と武相の歌人」

(39) 文政九年（一八二六）－明治二六年（一八九三）。医師。通称貞。名玄親（信）、盛貞、字文仲、号貫斎。武蔵国多摩郡府中宿六所宮禰宜織田筑後二男。伊東玄朴に入門。嘉永五年（一八五二）緒方洪庵に入門。翌年伊東玄朴の女婿となる。適々斎塾退学後長崎遊学。安政二年（一八五五）紀州侯寄合医師。同五年幕府奥医師に任じられる。万延元年（一八六〇）江戸種痘所設立。文久元年（一八六一）西洋医学所教授、同三年同所頭取。明治三年（一八七〇）大典医。（『日本洋学人名事典』武内博編著　柏書房一九九四年、中田雅博『緒方洪庵』思文閣出版二〇〇九年）

(40) 文政七年（一八二四）－明治四一年（一九〇八）。医師。名盛政、盛雅、号研斎。武蔵国多摩郡府中宿六所宮禰宜織田筑後長男。伊東玄朴に師事。水戸藩医。薬研堀で開業。（猿渡盛厚『武蔵府中ものがたり上巻』大國魂神社社務所一九六四年）

(41) 前掲註2同書「近世後期における武蔵総社猿渡容盛の歌集編纂と武相の歌人」

(42) 生没年不詳。医師。英学者。名を成、字を徳卿、号を山陰。出雲国今市駅出身。嘉永四年（一八五一）四月緒方洪庵の適々斎塾に入門（中田雅博『緒方洪庵』　思文閣出版二〇〇九年）。万延元年（一八六〇）二月松江藩士として蕃書調所教授方手伝に任じられる（文久元年カ「蕃書調所職員明細帳」勝海舟関係文書９２　国会図書館デジタルコレクション）。のち教授方。文久二年（一八六二）一〇月松江藩修道館洋学所医学教授。同三年松江洋学校創立と同時に教授。

(43) 文化六年（一八〇九）－明治一六年（一八八三）。下野国宇都宮藩家老。のち同国高徳藩主。藩主弟忠舜二男。幼名方十郎、嘉十郎。天保一三年（一八四二）家老間瀬家を継ぎ和三郎。宇都宮藩は文久二年（一八六二）の坂下門外の変に家臣が参加し、藩の立場が不利になったため、荒廃していた歴代天皇陵の修復を願い出て担当として上京、

その際間瀬から戸田へ改姓。直接朝廷から山陵奉行に任じられた。慶応二年（一八六六）宇都宮藩から一万石を分知され大名に列せられた。明治になって維新政府の権弁事や諸陵頭に任じられた。（『国史大辞典　十巻』吉川弘文館一九八六年）

(44) 生没年不詳。

(45) 天明八年（一七八八）－安政六年（一八五九）。国学者。通称左京、彦一郎、和佐治。字世霊、季尼。号中橋、皐舎、海西、海西漁夫、紫偈廼部、烏四鶏赤頼、究理塾。豊後国臼杵八坂神社神主鶴峯宜綱の長男。十五歳で臼杵藩儒武藤吉紀に入門。一七歳で上京、綾小路俊資に入門し和歌を学ぶ。後に安倍（土御門）家塾に入り天文学を学び、文化一三年（一八一六）師に従い江戸へ下るが、のち大坂へ戻る。天保三年（一八三二）四五歳で江戸に家塾究理塾を開く。天保九年（一八三八）水戸斉昭に招聘され和書編集所へ出仕。国語学、蘭学、天文学と幅の広い知識を有する。（近世文人事典）『六所宮神主日記』（前掲註1同書）や「漫遊雑記」（『猿渡盛章紀行文集』一六〇頁　府中市教育委員会一九八〇年）に交流が散見される。

(46) 詳細不詳。天保六年七月、盛章が浜松町の旅宿で同宿した人物。

(47) 生没年不詳。

(48) 「元治元年九月　手控帳」（『国分寺市史料集Ⅳ　本多雖軒関係』三国分寺市教育委員会一九八四年）

(49) 詳細不詳。

(50) 詳細不詳。

(51) 詳細不詳。

(52) 文化七歳正月「日録」（前掲註1同書『六所宮神主日記』七）

(53) 通称平作、民次郎、道介。字子章。号棟廼屋、久錬堂、碧湖亭、謀野散人、大椿亭、南山、尾室、麦叢、橘良、五惇、麟跡、蘆斎、雪斎。（『本宿小野宮内藤治右衛門家文書目録（2）』解題　府中市郷土の森博物館二〇一四年）

(54) 文化一一年（一八一四）－慶応元年（一八六五）。医師、書家。幼名謙蔵、諱定済、定脩。号覚庵、謙斎、安宇楼。武蔵国多摩郡下谷保村本田郡司の長男。書は市河米庵に学ぶ。（『本田覚庵日記』解説　くにたち図書館一九八九年）

(55) 天保六年（一八三五）－大正五年（一九一六）。医師、書家、画家。幼名為吉、通称仲右衛門。名有隣、雖、朗山。号雖軒、武相居士。武蔵国多摩郡国分寺村名主本多良助の四男。嘉永四年（一八五一）本田覚庵に入門。文久元年（一八六一）退塾し、府中宿で開業。その後慶応元年（一八六五）国分寺村へ戻り開業。（前掲同註49同書『国分寺市史料集Ⅳ　本多雖軒関係』解説）

(56) 小島資料館所蔵「黒船渡来之儀ニ付奉申上候覚」（『国事異聞三』（竪帳）『武相自由民権史料集　第一巻』町田市立自由民権資料館二〇〇七年）

(57) 安永七年（一七七八）－弘化四年（一八四七）武蔵国多摩郡小野路村名主。通称諫助、号桂屋。同村橋本政治二男、寛政六年（一七九四）小島政武の養子となる。文化八年（一八一一）名主後見約、翌年名主。（『小島日記　28』小島資料館一九八四年）

(58) 前掲註2同書「近世後期における武蔵総社猿渡容盛の歌集編纂と武相の歌人」

(59) 前掲同註49同書『国分寺市史料集Ⅳ　本多雖軒関係』三）

(60) 前掲註2同書「近世後期における武蔵総社猿渡容盛の歌集編纂と武相の歌人」

〔付記〕本稿は、平成二六年八月に行われた第二〇回神社史料研究会サマーセミナーでの報告をもとに、原稿化したものです。発表の機会を与えてくださった神社史料研究会に感謝いたします。また当日ご助言をいただきま

した橋本政宣代表、椙山林継先生、岡田荘司先生、ご質問ご指摘をいただきました皆様、および史料の利用をご許可くださった大國魂神社にお礼申し上げます。